

金光教の声

平成
23
年 4
月～
6
月
放
送
分

NO.395

【もへじ】

《あなたへの手紙》

第一回 家の取り壊し／引っ越し・・・・・・・・・・1

第二回 お国替え／物忘れ・・・・・・・・・・5

第三回 余命宣告／教会の活動・・・・・・・・・・9

第四回 コンプレックス／子育て・・・・・・・・・・14

《天地は語る》

第一回 もう駄目だと思ふときにも・・・・・・・・18

第二回 どうして学校へ行かないの？・・・・・・・・23

第三回 今も一緒に・・・・・・・・・・28

第四回 心行の勧め・・・・・・・・・・33

《こころの散歩道》

第一回 そこまではよかった・・・・・・・・・・38

第二回 神様を感じるお年頃・・・・・・・・・・42

第三回 はじめまして、ひいおじいさん・・・・・・・・46

第四回 あきらめず夢に向かう・・・・・・・・・・50

第五回 暑いですねえ・・・・・・・・・・54

《あなたへの手紙》

第一回 家の取り壊し／引っ越し

金光教放送センター

おはようございます。岡山県、金光教邑久教会の小林 眞です。

早速ですが、お便りを紹介しますね。これは、四十歳の会社員の方からです。

「二人の子どもたちも大きくなり、古くて狭くなった今の家を壊し、新居を建てることになりました。完成まではアパートでの生活になりますが、その引っ越しも終え、少し落ち着いたところです。それで、今まで住んでいた家です

が、長年住んでいた家でもあり、壊してしまうのが何か寂しい気がしています。」

こんなお便りです。

新居、今から完成する日が楽しみです。でも、今まで住んでいた家が無くなってしまっても、また寂しいでしょうね。

あなたのお便りを読んでいて、私は若い頃のことを思い出しました。

それは、ある教会の掲示板に、「長年住んでいた家がいよいよ壊されるといふ前の日、その壊される家を、家族全員で拭き掃除した」という内容だったんですが、当時の私はそれを読んだ時、「どうせすぐ壊してしまう家なのに拭き掃除だなんて、どうかしてる」。正直、そう思

つたんです。

それから何年かして、私が教会で御用をするようになってすぐのことなんですが、長年愛用してきた、軽自動車を買替えることになって、それで、その車が引き取られていく前の日に、奇麗に洗ってワックス掛けまでしたんです。それで、ワックスを掛けながら、思い出したんです。「壊してしまう家を、みんなで雑巾掛けをした」という例の話を。

ただの合理性、ということだけで考えると、いくら奇麗にしてみたところで、すぐに解体されることは、家も車も、もう決まっているんですから、そんなものに手間暇掛けるというのは、一見無駄なように思うかもしれませぬ。でも、今までお世話になってきたものに改めてお礼の

心を向ける、というのは大事なことだと思うんですね。

今は古くなってしまったのかもしれないが、その家で、あなたは大きくなり、そしてあなたの大切なご家族も、ひよつとするとあなたのご両親も、お世話になってきた家ですから、「どうせ壊してしまうもの」ではなく、「長い間お世話になりました」と、お礼の心を持ってお別れをして下さい。あなたが、「古い家を壊すのは寂しい」と言うのを聞いて、安心しましたよ。「家が無くなるのが寂しく思う」のは、大切に思っていたからでしょうね。

金光教では、「お世話になったものにお礼を言う心」を大切にしています。

もし、あなたの近くにも教会があれば気軽に

立ち寄って、そんな話を聞いてみて下さいね。

では次のお便りです。これは広島県にお住まいの二十八歳の女性の方から頂いています。

「この春、県内の方と見合い結婚しました。主人はすごくいい人で、今はとっても幸せなのですが、主人が横浜に転勤することになってしまいました。横浜は私には遠いです。親と遠く離れてしまうことや、せつかく仲良くなった大勢の友人たちとも、なかなか会えなくなってしまうのも寂しいです。見知らぬ土地に行くので、不安で仕方ありません。転勤は本当に突然の話で、驚きと不安で心の整理がつきません。どうしたらいいのでしょうか…」

こんなお便りです。

そうですね、広島から横浜に…ですか。あなたの寂しい気持ち、よく分かりますよ。二十八年間も慣れ親しんできた土地を離れ、ずっと守られてきた親元を離れ、おまけにお友達とも離ればなれになるんですから。誰でも、あなたと同じような気持ちになるんじゃないでしょうか。

私の友人に、二年ほど前、九州に転勤した人がいるんです。その友人の奥さんと、「転勤って、大変ですね」って、そんな話をしたことがあるんです。すると奥さんが言うのには、引越する前は、やはりあなたと同じように、心配で仕方がなかった。

でもいざ引越してみると、荷物の片付けやあいさつ回りなど、なんだかんだで毎日が慌ただしく、気が付いたらご近所さんや主人の会社の同僚の奥さんと、いっぱい友人や知人が出て来て、寂しがつてる暇なんてなかったそうです。

“会うは別れの始め”なんていう、何だか寂しくなるような言葉があるのですが、また逆を言くと、“別れは新しい出会いの始まり”なのかもしれませんね。その奥さんですが、「新しい友達がたくさん出来た」と喜んでましたよ。

あなたにはたくさんのお友達がいるそうですが、それは、あなたが今まで、友達のことを思い、大切にしてきた証拠だと思います。人を大切にすることは、最も大事なことのひとつだと、

金光教では教えているんです。

たとえ横浜へ行っても、特別変わったことはしなくても、あなたは今までと同じようにしていらいいのではないのでしょうか。これからいろいろと縁あって人と知りあうと思うのですが、是非その縁を大切にして、人を大切にして下さい。そうすれば、新しい友達がすぐに出来るのではないのでしょうか。

よく、その土地に慣れる、ということを言いますが、土地に慣れるというのは、地理に詳しくなるといふのもあると思うのですが、もう少し考えてみると、その土地に住んでいる人と仲良くなる、ということなのかもしれません。

すぐに横浜に慣れますよ。そばにはご主人もいることだし。大丈夫ですよ。私もお祈りして

いますね。



《あなたへの手紙》

第二回 お国替え／物忘れ

金光教放送センター

皆様、おはようございます。

富士山のすそ野に駿河湾が広がる自然豊かな静岡県にあります、金光教静岡教会の岩崎弥生です。今日初めてお手紙を読ませて頂きます。

まず初めに、静岡県にお住まいの五十五歳の望月さん、女性からのおはがきです。

「友達が亡くなり葬儀の日程を調べようと新聞を見ていたら、訃報欄に、『○○さんがお国替えになりました』とありました。金光教でお葬式をするらしいのですが“お国替え”ってい

い言葉ですね。その意味を教えてください」

というお尋ねです。

望月さん、「お国替え」をいい言葉だと言っ
て下さってありがとうございます。

望月さんは友達が亡くなって寂しい気持ちで
いた時に、この「お国替え」という言葉に出合
われて、言葉の意味から親しい人が消えてなく
なったのではない、天国かどこかで生きている
と思われたのでしょうか。

金光教では、「天と地は生きている間も死ん
だ後も我が住みかである」と教えています。そ
れは、命あるものは死んだ後、姿、形は見えな
くなってしまいますが、みたま霊は、見えなくても
どこか遠くに行ってしまうわけではなく、同じ

天地に共にあるということなんです。金光教の
神様は生きている時も、死んでからもお世話に
なる神様です。霊は、死んでからも神様のお守
り、お働きを受けているんです。そして私たち
のすぐそばで見守って下さっているんですね。

目には見えなくても、そばにいて心強いで
すよね。「お国替え」とは、目に見える世界か
ら、目に見えない世界に住む所を替えるという
意味なんです。

望月さんはお友達を亡くされ、さぞお寂しい
思いをしていることでしょうね。是非、生きて
いた時と同じようにお友達に話し掛けてみて下
さい。目に見えない相手に話し掛けることは、
抵抗があるかもしれませんが、お友達にはちゃ
んとあなたの声は届いていますから。

私の幼なじみも若くして亡くなりました。子どももまだ小さくて、奥さんや子どもたちが少しでも元気になればと思い、幼なじみとの思い出の曲をプレゼントしたことがありました。そのCDを届けて、車のエンジンを掛けたちょうどその時、ラジオからその思い出の曲が流れて来たんです。何か幼なじみが、私の気持ちを受け取ってくれた気がして涙があふれてきたことがあります。きっとあなたのお友達もあなたとすぐそばで、あなたのことを思ってくれていると思いますよ。

次に、七十代の女性の方からのお手紙です。

「私、最近物忘れに悩んでいるんです。先日、

嫁がよそ行きの服を着て慌てて出掛けようとするので、どこへ行くのか尋ねると、『今日は長男の授業参観ですって、前から言ってたじゃないですか!』と嫁が強い口調で言ってきたのです。いきなり突っ掛かる態度に私はムツとして、『私はいつでも何にも聞かされてない』と言い返してしまいました。その時私は、本当に全く聞いた覚えがなかったのです。ところが昨夜の夕食の時に、『明日は授業参観の後、進路の話があるから帰るのが遅くなってしまう』という話を嫁はしたと言うのです。そして嫁は、『何でも話しています!』と言い残し、バタバタと出掛けて行きました。私は、夕食の時の話を聞き、そういえばと思い出したようなことです。嫁も急いでいたのでイライラして言ったんだと

思いますが、私もつい余計な憎まれ口をたたいてしまつて…。

確かに最近忘れることが多くなつて情けなく困っています」

このようなお手紙を頂きました。

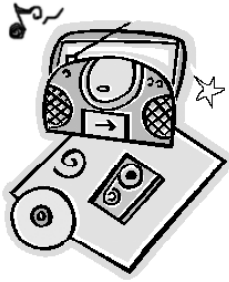
そうですか。物忘れで行き違いが起きてしまつたんですね。私は四十代なのですが、私もよく物忘れをして子どもに叱られるんですよ。

以前、私の尊敬する金光教の先生と話をしていた時のことです。お話が終わり、私が靴を履いて帰ろうとしたその時に、先生が、「岩崎さん」と私を呼ぶんです。何か私に渡す大事なものがあつた、それを渡し忘れていたということでした。私は、尊敬する先生でも忘れることがあ

るんだなど親近感を感じたのですが、しかし、次の瞬間、その先生が、「忘れたのではないなあ。今、思い出させてもらうたのじゃ。神様ありがとうございます」と手を合わせてお礼を申されているのです。忘れたことを嘆かずに、すぐに思い出させて頂いたことにお礼をされる先生は、やはりさすがだなあと思いました。

あなたもお嫁さんのやりとりで授業参観のこと、思い出されたんですよ。思い出させて頂けたんですよ。歳を重ねていけば、いろいろ不都合なこともあるかもしれませんが、忘れる心配より、思い出せたらそのことを、そして差し支えなかつたそのことを、喜ぶ生き方が出来たら、歳を取っていくことも不安でなくなるんじゃないですか。

そのためには、やはりお稽古が必要だと思う
んですね。毎日起きてきたことを感謝するお稽
古です。お稽古といっても、そんな難しいこと
じゃないんです。お近くに金光教の教会があり
ましたら、教会の先生に日々の暮らしのこと、
お話ししてみてください。あなたの不安や心配を
一緒に考え、取り組んでくれますよ。



《あなたへの手紙》

第三回 余命宣告／教会の活動

金光教放送センター

皆さん、おはようございます。西に六甲山を
望む兵庫県尼崎市にある阪急塚口教会の古瀬真
一と申します。どうぞよろしくお願いいたしま
す。

早速ですが、東京都にお住まいの道子さんと
おっしゃる、五十八歳の主婦の方からお便りを
頂きました。

「職場に向かう車の中で、以前から聞いてい
ます。いつも、心に残るお話をありがとうございます

います。今日は、どうしても私の話を聞いて頂きたくて、お便りしました。

実は、結婚以来いつも元気だった夫が、余命わずかの病气と診断されたのです。お医者さんの説明と一緒に聞いた夫自身は、これまでと変わらぬ態度で闘病しています。けれども、私はいえ、＼よき夫、父親として、家族のために仕事を打ち込んで生きてきた人が、なぜこんなことになるのか」と考えたりして、心が塞がってしまふのです。これからのことを考えると、とても気持ちが不安定です。どうしたら、穏やかな気持ちで夫に接することが出来るでしょうか？」

というお便りです。

道子さん、ご主人の重いご病气という中で、よくお便りを下さいましたね。このお手紙を通して、まずは道子さんのお気持ちが、少しでも落ち着いていくことになればと願っています。

厳しい現実をお聞きになられたご主人自身は、本当は辛くて苦しんでおられるのかもしれませんが、これまでと変わらない態度で闘病しておられるとのこと。本当にすごいことだなあと思います。

でもそれだけに、道子さんにしてみれば、「なぜ、夫が：」「この先、どうしたら：」というような、ご自分の思いを吐き出すことも出来ないままではいらつしやるのかもしれませんが。

お気持ちが不安定だとのことですが、厳しい病状であるだけに、道子さんが、つい先のこと

を思ってしまったのは、無理もないことだな
と思います。だから、ご主人には聞かせたくな
い道子さんの心のもやもやは、神様にお祈りし
て預け、笑顔でご主人の病室へ行けるといいで
すね。

お便りに、「夫は、家族のために仕事に打ち
込んで生きてきた」とありましたね。きっとご
主人は、「家族や職場の人たちに喜んでもらえ
るよう、今、出来ることを、精いっぱいやって
いこう」というような方ではないのかなあと想
像しています。

ご主人も、道子さんも、私も、今、この天と
地の間で、生かされて生きています。それは、
これまでも、闘病中の今も変わりありません。
掛け替えのない命と命が、共に生きている今な

のです。だから、道子さんも、「今、出来るこ
とを精いっぱいやっていこう」という姿勢で、
ご主人に寄り添われてはいかがでしょうか。道
子さんがご主人に、「話したい」と思うことを
話し、「してあげたい」と思うことをしていく。

そうすれば、きっと掛け替えのない素敵な時間
が生まれてくるのではと、信じています。

ご家族の皆さんそれぞれが、「今日一日」「今
日一日」というような心持ちで、大切に日々を
重ねていかれますように…。ご主人のご病気の
こと、私もお願いさせて頂きますね。

続いては、大阪府にお住まいの、弘さんとお
っしやる四十代の男性からのお便りです。

「私は、毎日、通勤の途中で、金光教の教会の前を通ります。教会の前には掲示板があり、いいことが書いてあるので、行ってみたいと思っっています。時々、何人かの人たちで教会の周りの道路や公園の掃除をなさっておられるのを見ましたが、金光教の教会では、どんな活動をなさっていますか？」

というご質問です。

弘さん、放送も聞いて下さり、教会の掲示板もご覧下さっているんですね。そして、お便りも。ありがとうございます。

金光教の教会は、アメリカ、ブラジルなどの海外にもあり、日本には千五百ほどがあります。

弘さんをご覧になったお掃除もそうですが、そ

れぞれの教会が、地域に根ざした活動をしていて、例えばボーイスカウトやガールスカウトの拠点になっている教会や、福祉施設のお手伝いなど、ボランティア活動に積極的な教会もあるんですよ。

教会によって、様々な活動が行われていますが、全ての教会で大切にしているのが取次とりつぎなんです。取次というのは、訪ねてこられた方の願いや思いを、教会の先生がじっくりと耳を傾けて聴き、神様に祈って、これから大切にして頂きたいことをお話しする。そうすることで、より良い人生が開けていくように整えていこうとする営みなんです。

こんな風にお話しすると、かえって、「よく分からない」と思われたかもしれませぬ。要

するに、「金光教の教会では、皆さんのお話を、どんなことでも聴かせて頂きますよ」と、いうことです。金光教の信者さんも、他の信仰を持つていらっしやる方も、また、特に信じている宗教がない方も、どなたでも同じように、お話を聞きしているんですよ。「こんなことを相談したら、どう思われるだろうか」というようなことは、ご心配なさらずに、「どんなことでも話せるところが、金光教の教会だ」と思っ頂いて、ぜひ一度、門をたたいてみて下さいね。

道子さん、弘さん、今日はお便り、ありがとうございました。



《あなたへの手紙》

第四回 コンプレックス／子育て

金光教放送センター

おはようございます。京都市、金光教船岡山教会の大引明子です。山口県にお住まいの十七歳、女子高生からのお便りを紹介します。

「私、この間好きな人に振られてしまいました。というより、片思いでずっと思っていただけなので振られたっていうのはおかしいのですが、私のよく知っている人と付き合い出したので、ちょっとショックです。彼女は可愛い。けれど、私は可愛くない。神様って不公平だなあ

と鏡を見る度に思います。彼女と同じぐらい可愛かったら、彼氏も出来て私ももっと楽しい毎日を送れるんじゃないかなあと思うのです」

こういう内容のお手紙です。

お便りありがとうございます。私は今五十七歳、あなたと随分年が離れて申し訳ないんですが、自分の話をしたいと思います。実は私、運動がとても苦手なんです。若い時はそれが非常に苦痛でした。運動が出来る人は輝いている。しかし、自分は駄目だ。無様な姿をさらすぐらいなら、やらない方がずっとマシと、何しろ逃げていました。今思うと運動をするしないというより、見栄えや、外見を気にしていたのですね。

ところが忘れもしません二十四歳の時、大勢の人が集まるテニスの親善試合に出なければならなくなったのです。当時、片思いの人がいたんです。その人もやってくる、そう思うとますますつらくて…。

さて当日、やはり、悲惨でした。もうこのまま消えてしまいたい。ボールは打てない、尻餅はつく、目を覆う有り様です。ところがです。

あまりにひどい私の姿に初めはあつげにとられていた人たちが途中から応援を始めたのです。ラケットがボールにかすっただけでも大歓声。走ってボールを捕ろうものなら大拍手。試合の後、みんなと一緒に笑い合っただのを覚えています。おまけにあまりに下手だったことで、片思いの彼と話すきっかけまで出来たのです。今ま

で自分を一生懸命取り繕っていたのに、そんな時、相手は通り過ぎただけでした。でも私が苦手なことでも無様に自分をさらけ出した時、相手が振り向いてくれたのです。意外でした。自分自身でいいのだなあと思いましたが、弱点がマイナスになるとは限らないのだなあとも思いました。小さな自信が出来ました。そして、もっと早くこのことに気付いていたら良かったなあ、そう思ったのです。

あなたもありのままの自分でいいんだな、この顔もなかなかいいなあ、私も神様からたくさんいいものを頂いているんだなあと思う日がきっと来るはずですよ。どうかたくさんさんの経験をして下さい。そして、様々な人と出会って下さい。今、弱点と思っているところが、私の魅力

になるかも知れないなあ、楽しみだなあ、そんな思いで自分の中にあるものを大切に日々を過ごしていつて下さることを私も及ばずながら願わせて頂きます。

さて、次のお手紙は三十五歳、滋賀県の主婦の方からです。

「私は五年前に結婚し、去年男の子が生まれました。主人は再婚なので、前の奥さんとの間に十歳の男の子が一人います。戸籍上は、長男と次男ということになりますし、四人で一緒に楽しく暮らしているのですが、どうしても気持ちの上で二人を同じようには思えないのです。二人とも兄弟なんだから分け隔てなくと思うの

ですが、なんだかそう思えば思うほど自分がおなかを痛めたのではない上の子に対して気持ちが悪くなくなっていくのです。理屈では割り切っても心が割り切れないというか、どうぞ私のつらい気持ちをなんとかして下さい」

こういう内容のお手紙です。

あなたはきっと優しくていいお母さんなんです。だからこそ子どもたちを大切に分け隔てなく育てようと思うあまり、自分の心が不安になつてくるのではないですか。

私の友達は小学校の教師をしているのですが、子どもの成績が思わしくなくて人に勉強を見てもらっているというので、「あなたが教えられる方がいいのに」と言うと、「自分が教えると、

『どうしてこんな簡単な問題が解けないのよ。

我が子なのに情けない』とか思つて冷静に教えることが出来ないのよ」と言うのです。教師であつても我が子は特別なんですね。でもね、我が子だからと思ひ過ぎるとかえつて子どもどうまくいかないことも多いのです。あなたは我が子なんだからと二人を無理に自分に近付けようとしていますが、反対にちよつと離れて、神様の子ども”と言う視点で子どもを見てみればどうでしょう。

私たちは皆、神様から命を頂いて人として生まれてきます。人は皆、神様の子どもなんです。あなたも縁あつて、親子として暮らしています。それは神様の代わりに大切な子どもを預かり育てているのです。

というと何だか理屈っぽいですが、ちよつと子どもさんを見る目が変わつてきませんか。あなたとの子、前の奥さんとの子、でも二人とも同じように神様の子、親とはいえ神様の代わりに育てさせてもらうんです。

大事な神様の子を、世の中のお役に立つように大切に育てさせて頂きますようにと日々お願いしつゝ二人の子どもさんを育ててはいかがでしょう。今の気持ちを大切に持ち続けると、そのうちに子どもが育つように、親もまた育てゆくことが出来るのです。あなたならきつと素敵な親子関係が築けるのではないでしょうか。

お近くに金光教の教会がありましたら、教会の先生に日々の暮らしのことお話されてはいか

がですか。あなたの不安や心配と一緒に考え、
取り組んでくれますよ。

《天地は語る》

第一回 もう駄目だと思うときにも

金光教放送センター

ナレーション

「何事にも、自分でしようとするが無理がで
きる。神にさせていただく心であれば、神がさ
せてくださる」

これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つ
です。今日は、この教えについてのお話です。

聞き手 先生。こんにちは。山田酒店の次男
のシンジです。

先生 おや、こんにちは。珍しいですね。ど
うぞ上がって下さい。



聞き手 どうもー。いやあ、初めて教会の中に

入ったつす。

先生 初めてでしたかね。それで、今日は、

何かご用ですか？

聞き手 うす。実は、自分、野球部に入つてま

して、今度、甲子園出場を決めたんです。

先生 そうですね。おめでとう！ いい試合

でしたね。

聞き手 あざつす。で、自分、心配なことがあ

るんす。自分らのチーム、勝つてる時は、すつげえ、いいプレーが出るんすが、ピンチになると、みんなシュンとして、全然実力が出せなくて。何とかせんといかん思つてたら、お母ちゃん

が、「金光さんの先生、時々ええこと

言うから、駄目もとで、話聞きに行つ

てみい」って言うもんで、来てみたつ

す。先生、ピンチの時に元気が出るよ

うなおまじない、ないすか？

先生 そうなんですか。そうですね。おま

じないになるかどうか分かりません

が、一つお話をしましうか。絶体絶

命のピンチに立たされた人のお話で

す。

私のひいおじいさんは三重県でお百姓をしてました。ある年、ひどい干ばつになりましたね。全然雨が降らないんです。どの家でも、田植えを諦めてしまふようなことでした。農業つて、天

候次第ですからねえ。

聞き手 そつすね！

先生 ひいおじいさんの所では、それでもそれなりに苗が育ちました。そして、それを田んぼに植えました。

聞き手 水はどうしたんすか。

先生 本当は田んぼには、たくさん水が必要です。でも、溜め池も干上がり、水路にも水は流れていません。井戸から水を汲み上げては田んぼに通ったそうです。といつても、一カ所に流し込んで、地面に吸われるだけです。そこでひいおじいさんは、田植えの後、ちょっと変わった方法で水をまきました。

聞き手 どうやったんすか。

先生 神様にお供えする榊さかきという木の枝が

ありますね。あれをじゃぶんと桶おけにかけて、その枝を振って、水をまいたんです。

聞き手 ええ、そんなもんで水がまけるんすか。

先生 葉がたくさんついた榊の枝だと、思っただよりにたくさん、広く、水がまけます。でも、しよせん水まきですからね。田んぼは広いから時間も掛かるし、井戸から取れる水にも限りがあったでしょうし、とても稲の成長に必要な量の水をまくことは出来なかつたでしょう。

聞き手 うわあ。最悪つすねえ。他の人は、どうしてたんすか。

先生 他の人は田植えをしなかつたそうで

す。無駄ですからね。だから、仕事は暇だったと思いますよ。ひいおじいさんがそんなことをしてるのを見て、「金光さんの信心したら、あんなことせんといかんのか」と、呆れていたそうです。でも、ひいおじいさんは、ずっとそれを続けました。

聞き手

それで、どうなったんですか。米は取れ

たんですか。

先生

ええ。取れたんです。八反の田んぼで

十一俵のお米が取れました。ふつう一

反で五俵は取れますから、少ないとい

えば少ないんですが、何もしなければ

収穫はゼロですからね。しかもその年

は、干ばつということで税金が免除に

なりました。小作料も納めなくていい

んです。だから、米が取れなかった人

たちは翌年生活に困りましたが、ひい

おじいさんは、「あんな楽な年はなか

った」と言っていたそうです。

聞き手

すごいすねえ。ひいおじいさんは、

榊で水まきしたらお米が取れると信じ

てたんですね。

先生

うーん。どうでしょうか。多分違うと

思います。

聞き手

えっ、違うんですか。

先生

農業のプロですからね。そんなことし

ても駄目だということは、百も承知だ

ったはずですよ。

聞き手

駄目だと思っただんなら、するわけない

じゃないすか。

先生 お百姓の仕事は、米を作ることです。

でも実は、米が育つ上で人間の出来ることは、ごく一部です。ほとんどは、天地の命が天地の働きで育つだけのことなんです。苗代には苗が育った。そのままにしておけば枯れるだけ。それでは申し訳ない。だから植えたんです。そして榊で水をあげました。それがその時出来る精いっぱいのことだったからです。その上で枯れたとしても、お百姓としての仕事はしていると言えるんです。〃米を作る〃のではなく、〃米を作らせてもらっている〃と知っていたから、そうせずにはいられなかった

んです。

聞き手 うーん。

先生 金光教の教祖は、「何事にも、自分で

しようとする」と無理ができる。神にさせていただく心ですれば、神がさせてくださる」と教えて下さっています。野球でも、ピンチの時は苦しいんですよ。ね。「この期に及んでそんなことをして何になる」と思うようなこともあると思います。でも、そんな時も、悪びれず、胸を張って堂々とプレイ出来たら素晴らしいですね。心がへこみそうな時には、「いろんな人に支えられて野球をさせてもらってるんだ。たとえ無駄なように思えても、自分に出

来ることを精いっぱいさせてもらおう

《天地は語る》

う」と思つて頑張つて下さい。しつかり実力を出して、いいプレーが出来るよう、祈つていきますからね。

第二回 どうして学校へ行かないの？

金光教放送センター

聞き手 ういす！ あざつす。来て良かったつ

す。みんなにも話してみます。

ナレーション

ナレーション

「何事にも、自分でしようとするが無理がで
きる。神にさせていただく心であれば、神がさ
せてくださる」

今日は、この教えについてのお話でした。

「わが子の病気でも、かわいい、かわいいと思つてうろたえてはいけない。言うことを聞かない時にも、ままよと思つてほうっておくような気になつて信心をしてやれ。おかげが受けられる」

これは金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日は、この教えについてのお話です。

先生 おはようございます。

光子 先生、初めまして。光子といいます。

今日は娘のことで、聞いて頂きたいことがありまして…。

先生 光子さん、初めまして。なんか、浮かない顔をしておられるようですが…、

お子さんのことでお悩みですか。

光子 ええ。実は、十年前、夫と離婚し、女

手一つで懸命に三人の娘を育ててきました。でも、長女ののぞみが高校生になつてすぐ不登校になりました。最初は、本人が希望していたデザイン科に進学出来てあんなにうれしそうだったのに…最近、高校にちゃんと行っていないようなんです。私も仕事をしていきますので、朝、家を出てからはのぞみ

に任せているのですが…。

先生 そうでしたか…。

光子 のぞみが通つてる高校は、本人が強く

希望していた進路だっただけに、合格した時はその喜びはひとしおでした。

ところが、学校へ通い始めて間もなく、クラスの雰囲気になじめないことに加えて、私一人の収入で大変なので、「どうしてうちはこうなの」と不満を訴えるようになり、学校へ行かなくなつてしまいました。学校の先生に話を聞いたら、どうも遅刻が多かつたらしく、このままでは進級出来ないと言われました。担任の先生の薦めでカウンセラーに相談してみたらどうかと言われま

して…。

先生 相談してみたんですか？

光子 はい。一度、話を聞いてもらいました。

すると、適応障害と診断されました。

適応障害というのはストレスが原因

で、頭痛や吐き気などがして、社会生

活にうまく適応出来なくなる障害のよ

うです。「今は、お母さんが黙って見

守ってあげることが大切です」と、言

われました。だけどその後、のぞみ

は登校時間になると腹痛を訴え、布団

から出ようとしない毎日が続き、欠席

が多くなりました。その姿に、私はつ

い、「どうして学校へ行かないの？」

と聞かずにはいられませんでした。黙

先生

って見守ると言っても、放っておくことは出来なかつたんです。

そうですね。金光教祖の教えに、「わ

が子の病気でも、かわいい、かわいい

と思つてうろたえてはいけない。言う

ことを聞かない時にも、ままよと思つ

てほうっておくような気になつて信心

をしてやれ。おかげが受けられる」と

あります。「かわいい」というのは「か

わいそう」という意味ですね。また「ま

まよ」というのは「神様にお任せする」

ということ。つまり、「わが子が病気

になつても、かわいそうにかわいそう

にと思つてうろたえてはいけません

よ。言うことを聞かない時でも、神様

にお任せして放っておくような気持ちになつて信心をしてやりなさい。おかげが受けられます」ということなんです。神様にお任せするといつても、ほつたらかすということではないんです。黙つて見守るんです。でも、簡単に出来ることではありませんよね。そこを神様をお願いしてさせてもらいましよう。見守ることは「祈る」ということなんですよ。

光子　　そういえば、のぞみは学校には行けないものの、コンビニのアルバイトには行っているんです。私は学校に行けていない心配ばかりでうろたえてしまつて、今の今まで忘れてしまつていた

のですが、前にふと、アルバイト先に行つたことがあります。その時見たのは、笑顔で一生涯懸命働くのぞみの姿でした。今、その時の姿を思い出し、学校へ行けないからかわいそうだろうたえたりせず、心配する気持ちを放して、あの子のことを信じてやろうと思ひます。

先生　　それはありがたいですね。

光子　　それにたまに学校へ行けている時は、クラスの子の悩みを聞いてあげることもあるみたいで、昨日は、「つらいのは私だけじゃないの」と、友達や学校での出来事を話してくれました。本当は学校に行きたいんだと思ひます。

先生 のぞみさんは優しい子なんです。金

先生 大丈夫！ 娘さんは必ず元気になりま

光教の教祖も我が子のことでは苦労が

すよ！

多く、この、「ままよと違って：信心

をしてやれ」という神様からのメッセ

ナレーション

ージを心に感じ、それを実践する中で、

「わが子の病気でも、かわいい、かわいいと

幸せへの道が開けていきました。光子

思っとうろたえてはいけない。言うことを聞か

さんはこれから先、どのような出来事

ない時にも、ままよと思っほうっておくよう

と出合われるか分かりませんが、親が

な気になって信心をしてやれ。おかげが受けら

先の心配をしないで祈り、のぞみさん

れる」

の話聞いてあげて、お子さんの気持

今日はこの教えについてのお話でした。

ちに寄り添ってあげて下さい。のぞみ

さんが無事、進級、進学出来るように

私も一緒にお願いさせて頂きます。

光子 先生、今日は聞いて頂き、ありがとう

ございました。



《天地は語る》

第三回 今も一緒に

金光教放送センター

ナレーション

「若死にをすると、みな嘆いて心を苦しめるが、死ぬということは、もみを臼でひいた時、

殻と実とが分かれるようなものである。時が来れば魂と体とが分かれるのである」

これは金光教の教祖の教えの一つです。今日は、この教えについてのお話です。

聞き手 こんにちは。

先生 こんにちは、吉原さん。いつも町内会

ではお世話になっていきます。今日はどうしたんですか？

聞き手

息子が亡くなって、もうすぐ二年になるんですが、思い出すとまだまだつらくて……。一度、金光教の先生に話を聞いてもらいたくて、教会にお参りしました。

先生

長男の雄一君のことですね。残念なことに雄一君はたしか、成人式を迎えて数日後に亡くなられたんですね。本当に突然のことで私も驚きました。前日まであなたと電話で話していたそうですね。

聞き手

ええ、大学の寮から、熱っぽくて少ししんどいと、わざわざ電話してきましたん

です。近くだったらすぐ行ってあげたんですが……。まあ大丈夫、心配しないでという返事にいったん心を落ち着かせ、次の日に始発で向かいました。が、すでに雄一は冷たくなっていました。

悪い夢を見ているとしか思えませんでした。検死を受け、肺炎とインフルエンザの併発が原因だと診断されました。

先生 本当につらく悲しいことでした。

聞き手 もし信心していたら、雄一は死なずに助かっていたんでしょうか。こんなつらい思いをしなくて済んだのでしょうか。

先生 うーん、そうではないんですよ。信心

していたらつらい目に遭わないんだとしたら、どうですか？ みんな死なないで、ずっと生きていることになりませんか？ 信心していても、つらい経験はします。

聞き手 やっぱりそうなんですネ。

先生 でもね：信心していたら、難儀に出遭っても、つらい思いを乗り越え、前に進む力が湧きます。神様の思いや願いを教えてもらえますから。

聞き手 神様の思いや願いつて、どんなことですか？ 神様って人間を幸せにしてくれるんじゃないんですか？

先生 ええ、神様は、私たち人間を救い助け

ようと思つて、ただただひたすらに私

たちの幸せを願って下さっています。

聞き手 なのに、私も雄一も幸せじゃないです

…。

先生 人間の命の長さはみな違います。でも

生きている間、神様の思いや願いを受けていることは、皆同じです。雄一君も神様の思いや願いを受け、精いっぱい生きてきたはずですよ。幸せと考えることもたくさんあったと思います。

聞き手 雄一の葬儀の時、地元の高級生たちに

加え、大学の友達がバスをチャーターしてわざわざ駆け付けてくれました。

地元を離れて通っていた大学でも、たくさん友達が出来て楽しく過ごせていたんだなあ、みんなに来てもらってう

れしいだろうなあ、雄一は幸せ者だな

あと思えて、私もうれしかったです。

うれしかったんですけど…あー、思い

出すとまた余計つらくなります。

先生 もし雄一君が、ずーっとつらい顔のまま

のお母さんを見たらどうでしょう。

つらい顔のお母さんより笑顔のお母さ

んの方がうれしいんじゃないですか？

聞き手 ー、まあ、それはそうだと思います

…。

先生 神様も同じで、悲しみを乗り越えて、

いつも笑顔で生きていつてほしいと願

って下さっています。雄一君がいなく

なつてつらいでしょうが、今を大切に

する思いになつて、少しずつ前進して

欲しいです。

聞き手　でも、ポカーンと胸に穴が開いてしまっているみたいで、心は弱ったまんまなんです。

先生　教祖は、「死ぬということは、もみを臼でひいた時、殻と実とが分かれるようなものである。時がくれば魂と体とが分かれるのである」と教えて下さっています。雄一君でいうなら、雄一君が生まれる時、魂と体が授けられ、亡くなった時、魂は体から離れたんです。魂は生き通しで、今も天地に生きていますよ。

聞き手　天地に生きていますのですか？

先生　魂は、生きている間も死んでからも、

この天地にいることに変わりないんです。雄一君に授けられていた魂も…(ちよつと考え込む感じ) んーと、そうだなあ…家で留守番をしているのやら、大学の友達に会いに行っているのやら、どこでどうしているのかはわかりませんが、あなたが生きている天地の中に、今も一緒にいるんですよ。

聞き手　雄一の魂が、「今も一緒にいる」って言われると、なんだかうれしくて、力が湧いてきそうです。

先生　うん、そう言ってもらえて私もうれいんです。神様も、あなたの前向きな姿を喜ばれていると思います。きっと、雄一君もね。

聴き手　そうかもしれませんね。先生、今日は

ありがとうございます。

先生　はい、よくお参りでした。

ナレーション

「若死にをすると、みな嘆いて心を苦しめるが、死ぬということは、もみを臼でひいた時、殻と実とが分かれるようなものである。時が来れば魂と体とが分かれるのである」

今日は、この教えについてのお話でした。



《天地は語る》

第四回 心行の勧め

金光教放送センター

ナレーション

「表行よりは心行をせよ」

これは、金光教の教祖、金光大神の教えの一つです。今日は、この教えについて、先生に話を伺いします。

聞き手 先生、こんにちは。これはどういう教

えなんですか？

先生 「表^{おもて}の行い」と書いて「わぎょう」、
「心の行い」と書いて「しんぎょう」

聞き手

と読みます。金光教の教祖は、真冬に水をかぶったりする水の行や、火の上を裸足で渡ったりする火の行、あるいは特定の物を食べない物断ちや断食など、目に見える、表に表れた特別な修行を、「表行」という独自の言葉で言い表されました。そして、そうした「表行」より、他の人からは見えない、心の行をするように勧められたのです。ところで、あなたはこれまで、何か修行をしたことがありますか。

私は特別の修行をしたことはありません。ただ、私が小さい頃、父は心臓が悪くて倒れたことがありました。その時、神様に「好きなお菓子を食べませ

んから、どうぞ父を助けて下さい」と
真剣にお願いしたことがあります。父
の具合が良くなるまで、一カ月程。

先生 じゃあ、その一カ月、お菓子を食べる
のを我慢したんですか？

聞き手 ええ、何とか。

先生 神様は、あなたが好きなお菓子を我慢
したのと引き換えに、お父さんを助け
て下さったのではないと思います。「お
父さんを助けてほしい」というあなた
の切実な願い、そのために好きなお菓
子を我慢しようと思っただけなげさ、そ
んな純真な願いに、神様は応えて下さ
ったのだと思います。

聞き手 一カ月だけですが、目の前で兄弟がお

菓子を食べるのを見てるのはつらかつ
たです。願いをかなえるために好きな
物を断つ、というようなお願いは、自

分には無理だなと思いました。無理に
特別の修行をしなくてもいいのなら、
気持ちが悪くなりますね。

先生 金光教の教祖は、特別な場所で特別な
ことをする修行の代わりに、職場や家
庭など、生活の場で修行することを勧
めておられるですね。それは、誰も
が、いつでも出来る修行といえるでし
ょう。

聞き手 生活の場での修行って、具体的にはど
うすることですか。

先生 教祖は、「人に不足を思わない」こと

や、「物事の不自由を行」とすること
を、誰にも言わないで行うのを、心の
行の例として挙げておられます。

聞き手

誰もが、いつでも出来るとはいえ、人
に対して不足を思わないというのは、
随分難しいように思います。私自身、
毎日のように、主人や子どもに対して
「ああしてくれたら、こうなってくれ
たら」と、不足心を持ってばかりいま
すし…。

先生
昔も今も、人との間柄、人間関係が一
番難しい、切実な問題ではないでしょ
うか。お互い不完全で、至らないとこ
ろの多い人間なのに、つつい他人の
足らないところに目がたって、腹を立

聞き手

先生

てたり、責めたりしがちです。こんな
心の習性は誰にもありますから、人に
不足を思わないようにするといふのは、
まさに心の一大修行とも言えます。
確かにそうですね。

私はよく、お参りされる方にお話しす
るんです。「自分自身の実際の有りよ
うを見つめたら、欠点は多いし、能力
も限られているし、人に対してもどれ
ほどのことが出来ているだろうか。そ
んな足りないだらけの私でも、神様は
丸ごと抱えて、お生かし下さり、慈し
んで下さっている。そんなお互い同士
なんだから、足りないところに心を向
けるより、良いところを見つけるよう

にして、足りないところを補い合っ
ていくようにしましょう」と。

聞き手 心の行と言っても、精神修養とは違
う

んですね。

先生 人を不足に思わない修行は、神
様のい

とし子である人間同士が、争わずに
仲良く共に生きていく、そんな生き
方を心掛けていくことなんです。

聞き手 では、物事の不自由を行とす
るとい

先生 これは、思い通りにならない事
柄に出

遭っても、そこから逃げずに取り組
ませてもらいましょう、ということ
です。

先の人間関係でもそうですが、経済
や健康といった面でも、自分の思
い通り

聞き手 にならないことが多いです
からね。

そうですね。主人は飲食店をして
いるんですが、最近はお客さんが
少なくて、いつも主人と愚痴ばっ
かりこぼしあっているんです。
先日の大雨の日には、お客さん
はたった一人だったんです。お
店をやっていたいけるか、心配
になってしまいました。

先生 心の使い方と言えば、こんな
大雨の中、

わざわざ来て下さったと思えば、
一人のお客でもありがたく思える
のではないのでしょうか。心配や
不足の心を持ってお料理を作る
のと、ありがたい思いで作るの
とでは、料理の味も変わるで
しょう。

聞き手 プラス思考ですね。

先生 思い通りにならない時、逆境の時こそ、物事をプラスに受け止めるように務めていくこと、それも心の行といえます。

もつと言えば、そんな時、問題にばかり心が奪われ、心配や不安を大きくしてしまいがちですが、むしろ、恵まれていることに心を向けることです。例

えば、健康で働かせてもらえること、店を借りられること、色々な食材を使わせてもらえることなど、人や物や神様の恩恵を十二分に受けている自分なんでしょうね。そんな自分であることが分かれば、思い通りにならない事柄も不足・不安に思うことなく、乗り越えて

いけるのではないのでしょうか。

聞き手 元氣が出る教えなんですね。私も、少

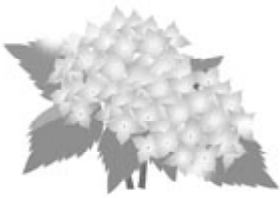
しでも心行が出来るように頑張りたいと思います。先生、今日はありがとうございました。

先生 ありがとうございます。

ナレーション

「表行よりは心行をせよ」

今日は、この教えについてお伺いしました。



《こころの散歩道》

第一回 そこまではよかった

金光教放送センター

三月末のことなのですが、大阪に住んでいる
いとこが、久しぶりに我が家にやって来ました。
五十代半ばの、元気なおばちゃんです。

私は、彼女が来る前の日、「せっかく都会か
ら田舎に来るんだから、そうだ！ ツクシを食
べさせてあげよう」、そう思い立ちまして、散
歩がてらツクシ採りに出掛けました。ところが
どこまで歩いても見つからない。普段はあちこ
ちで見掛けるのに、探すとなると、なかなか見
つからないもんですね。二時間ほど歩き回って、
ようやく鍋一杯分ぐらいの量を集めることが出

来、早速きんぴらを作って、いとこを待ち受け
ました。

翌日、食事の時にもしましたら、いとこは喜
びましてね、「わあ、ツクシやないの。これ、
デパートで小さい一束が三百円もするねんで」
と言います。私もうれしくなって、「どうぞ遠
慮せずに食べて」と勧めました。一口味をみて、
「おいしい！」と言ってくれます。さらにうれ
しくなりました。

そこまでは良かったんです。
しかしその後、私は思わず悲鳴を上げそうに
なりました。

喜んで食べてくれるのはいいんですけど、食
べる勢いがすごいんです。ブルドーザーみたい
に、箸でガガーッと一気にすくい上げて、モリ

モリ食べる。

皆さんご存じでしょうか。ツクシの料理で大変なんですよ。採ってくることに、ハカマと言いまして、茎の周りのギザギザした固い部分、あれを取り除くのに手間が掛かる。しかも、茹^ゆでてアク抜きをし、水にさらして、味付けして、ようやく出来上がった時には、鍋一杯あった材料が、片手一杯に縮まっているんですよ。

いとこの食べ方を見て、「ああ、その一口にどれだけ時間が掛かっただろうか」なんて考えてしまいました。

「そうだ、いところにも体験してもらおう。そしたらきつと、ツクシを見る目が変わるに違いない」

私は次の日、「ツクシを採りに行こう！」と言って連れ出しました。今度は車に乗せて、確実にたくさん採れる場所まで行きました。春の日差しを浴びて、ツクシが辺り一面に生えているのを見て、彼女は予想通り、「わあ！ こんな所があるんやなあ。楽園やわ」と喜びました。私も夢中で摘み始めました。

ふと気がつくと、彼女の姿がありません。遠くを見ると、連れて来ていた犬に散歩をさせています。私が再び摘み続けていると、彼女は犬と一緒に何往復かして、通り過ぎるたびに言うんです。

「よっほど好きなんやなあ。好きやないと、出来へんなあ」

あきれたみたいに言うんですよ。結局ツクシを摘んだのは、ほとんど私ばかりでした。

家に帰ったらハカマ取りです。「手伝ってくれる？」と言いますと、「手が真っ黒になるやろ。そんなんようせんわ」。

結局私一人で何もかもすることになって、料理が出来上がった時には、「これお土産にくれる？ あ、そう、おおきに、ほな全部もろて帰るわな。……そやけど、少ないなあ。ほんまにこれで全部か？ もっと採ってもろたら良かったなあ」。

何でこうも厚かましいんでしょうね。んもう、腹が立つなあ……。

けれどもねえ、考えてみたら、私の自業自得

なんですよ。

もももとは純粋な親切心で、おいしいものを食べてもらおうとしたわけで、別に自慢しようとも、恩に着せようとも思っていなかった。いところが喜んでくれたら、もうそれだけで良かったです。そういう純粋な心は、純粋なままにしておけばいいのに、バカですなあ。つい、余計な心が働いて、その結果、自分で自分を苦しめることになってしまったわけですね。

そういえば、こういう言葉がありました。

「どんな物でも、良い物は、人に融通してやれば人が喜ぶ。それで徳を受ける」

これ、金光教の教えの一つなんですけどね、

「徳を受ける」——つまり、自分の苦勞や真心

は、神様がちゃんとご存じで、ご褒美に徳を授

けて下さるんだから、何も人に恩を着せること
はないんだよ、というわけです。

人に物をあげる時ばかりじゃありません。た
とえば、トイレから出る時に、人が脱ぎ散らか
したスリッパを、さりげなく揃えて出てくる人
がいます。道端に落ちているゴミをひよいと拾
って、通りすがりのごみ箱に入れる人もいる。
誰も見ていなくても、人に評価してもらわなく
ても、自然体で良いことが出来る。こういう人
が、「徳を受ける」人なんでしょうね。

良いことが出来たらありがたい。それ以上余
計なことは考えない。それが、今の私の目標で
す。

また今度、ツクシの季節が巡ってきたら、い

ところを呼んでごちそうしようかな。



《こころの散歩道》

第二回 神様を感じるお年頃

金光放送センター

「お母さん、神様っているよね！」

小学四年生の次女が、学校から帰ってくるなり私に話し出したことがありました。

「いったいどうしたの？」

「もえちゃんが神様なんていないって言うの。神様なんて見たこともないし、どこにもいないよって……」

「そうなの……」

「でもね、私は神様はいると思うんよ。だってお父さんやお母さんが私たちのことをいつも神様をお願いしてくれているし、目には見えな

いけど神様は絶対いると思うんよ」

「そうね、空気や風だつて目には見えないけど、その空気があるおかげで私たちは生きていられるからね」

「うん。でも、もえちゃんが神様がいなくて言った時、何にも言えなかったの。……神様いるよね？」

「いるよ」。そう言つて私は次女を抱き締めました。この子に神様を感じる心が育っていることに感謝しながら。

そう言えば、長男と長女にも同じ頃に神様を感じる出来事があったことを思い出しました。

今は中学三年になる長男ですが、小学四年生のころにラグビーを習い始めました。ラグビー

というスポーツは、体と体がぶつかり合うことが多いので、生傷が絶えません。

ある日の練習の後、傷がひどい時に、「大丈夫？」と私が声を掛けると、「大丈夫。ちょっと痛いけどね」と答えました。

「お父さんやお母さんはね、いつもあなたがけがをしないように神様をお願いしてるよ。神様が守ってくれているから、これくらいで済んでるのかもしれないわね。あなたも自分のことをしっかりと神様にお願ひしないとね」

「うん、分かってる。それよりお母さん、『ワソフォアオール・オールフォアワン』っていう言葉、知ってる？ コーチから教えてもらったラグビーの言葉なんだよ。『一人はみんなのために、みんなは一人のために』っていう意味で、

ラグビーは仲間を大事にする気持ちが何より大事なんだって」

「良い言葉ね」

「お母さん、僕のこと、いつも神様をお願いしてくれているよね。だから僕もチームの仲間のこと、神様にお願ひすることにするよ」

「まあ、それはいいことね。お母さんもあなたや仲間がラグビーでけがをしないように、今まで以上に一生懸命神様にお願ひするからね」

「ありがとう！」

けがで痛いはずなのに、それも忘れて笑顔で話す息子の顔を見て、神様にお礼申さずにはいられませんでした。

中学一年になる長女は、幼い頃から体を動か

すのが大好きです。今は、テニス部に入って毎日遅くまでの練習で真っ黒に日焼けしています。その長女がやはり小学四年生の時のことです。

その日もいつものように学校から帰って来てランドセルを置くやいなや、「行ってきまーす」とお友達と遊びに出掛けました。いつものことなので、「気をつけて〜」と送り出したのですが、その一時間後に電話で娘の事故を知ったのです。公園の遊具から落ちて左手首の骨折、全治二カ月でした。

骨折してからの毎日は不自由なことが多かったと思います。そんなある日のこと、学校から帰ってきた娘が、「お母さん、今日けんた君が私のかばんを持ってくれたんだよ」とうれしそ

うに話してくれました。同じクラスのけんた君という男の子は、どちらかと言えば普段娘とあまり話すこともないのに、授業で別の教室に移動する時、さりげなく娘の荷物を持ってくれたのです。

私は娘に、「良かったね、けんた君は骨を折って大変そうあなたを見て、何とかしてあげたいと優しい気持ちで手伝ってくれたんだね」と言うと、「骨を折って色々困ることも多いけど、みんなが優しくしてくれるから、うれしいこともいっぱいあるよ。お風呂に入っていて、片手だとかんなに洗いにくいと思わなかった。お母さんに髪を洗ってもらえるのもうれしいよ」と恥ずかしそうに話すのでした。

「私、元気になったら、今までよりももっと、

困っている人がいたらお手伝いしようと思う。

お母さん、これからもけがをしないように私のこと神様をお願いしてね」

「もちろんよ。あなたのその心、きっと神様も喜んでくれるわよ」

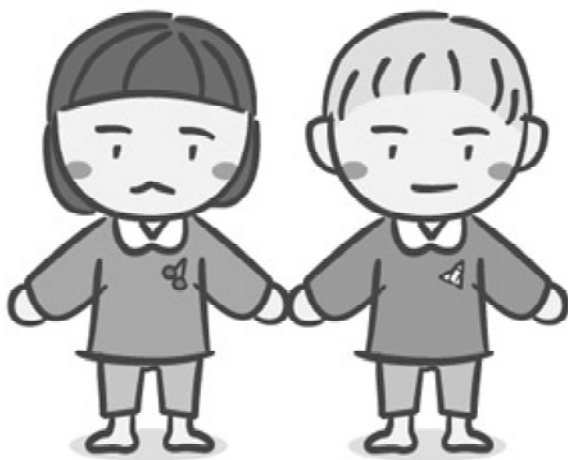
長女にとって、この左手首の骨折は、人の思いやりやそれまで出来ていたことが決して当たり前ではなかったことに気付く良い機会となりました。

「ただいま」。元気な声で次女が帰ってきました。

「お母さん、今日ね、もえちゃんに『神様はいると思う』って言ったよ」

「そう、それで、もえちゃんは何て言ったの」

「私がそう言うなら、神様はいるかもしれないねって」



《こころの散歩道》

第三回 はじめまして、ひいおじいさん

金光教放送センター

かった。もちろん、僕も驚きを隠せない。
「皆さん、ごめんなさいね。気味が悪いでしよう」

僕は周りを気遣って、説明した。

「えーっ！！ 何だって？ 頭蓋骨？ 大腿骨も？」

「いったい何だい。えらく物騒な話が聞こえてきたけど…」

携帯電話でのやりとりに、周囲は色めきたつ

た。出張中のことだった。我が家のお墓の改修工事の途中で、地中深くからひいおじいさんのお骨が発見されると妻が知らせてきたのだ。

どうやら家ではてんやわんやらしい。何しろひいおじいさんが亡くなったのは九十七年も昔のことなので、誰も地中の石室の存在を知らな

を直すなんて、あなたは、尊いことをしているんだね。それにしても、都会の真ん中で土葬なんてね。よほど格式が高いお家なんだねえ」と上司が言ってくれた。

「とんでもない。ただの農家の小せがれですよ」

今から百二十年前のこと、十九歳のひいおじいさんは、当時不治の病と言われた胸の病気にかかり、絶望のただ中にいた。兄も弟もすでに

亡くなっていた。そんな中で信仰に出合い、生きる望みを得た。そして、「もし健康になれたなら、この命を神様に捧げます」と誓ったのだ。そうだ。

その後、幸いにも命の危機を脱したひいおじいさんは、その誓いどおりに、充分な体でないながらも神様にお仕えし、自分と同じように苦しんでいる人たちの悩みや苦しみを聞いては神様に祈り、導いていった。その生き方に共感して、何人かの弟子も出来た。しかし、三十六歳の若さで亡くなってしまったのだった。

ひいおじいさんの死を惜しんだ人たちは、できる限り丁重に葬ろうとしたに違いない。もちろん火葬が丁重ではないということではないが、ひいおじいさんのことを忘れたくないとい

う思いがそうさせたのではないだろうか。

お骨がうちに帰ってくるなんて、滅多にあることじゃない。「あらまあ、恐竜博で見たのとおんなじ」と母が驚いて言った。「ちよつと、ちよつと、それはあなたのおじいさまのお骨です。まったく」。

でも、そう言えば、奇麗で完全に整っている。それに、何か、妙に明るいか、健康的な感じがする。若かったからだろうか。ほんとうに病気で亡くなったのかと思うほど、大きな骨だ。それにしても：僕の頭にそっくりだ。いや、僕がそっくりというのが正しい。自分のご先祖様と対面し、不思議な気持ちになった。

「ひいおじいさん。改めまして、ひ孫です」
僕は、お骨に語りかけた。

「すみません、ご迷惑をおかけします。工事が終わるまで、しばしのお里帰りを楽しんで下さい。…なんですって？『私は御霊みたまになつてい

るから、どこへでも行ける。それに、この家にはいつも帰ってきておる』ですって？ それはそうですよね。でも、まあ、ゆつくりして下さい」

実は、長年親しんできたお墓を作り直すのはとても勇気がいった。僕は最後の最後まで墓石に手の平を当てて名残を惜しんだ。ひいおじいさんと握手をしているのだと思つて。ところが、こうして、じかにひいおじいさんに触れることが出来た。だから、人は不気味に思うだろうが、僕はうれしくて仕方がなかった。

それから四年後の夏のこと、僕は体調が優れなかった。もともと呼吸器系が弱く、いつも春先から咳せきが続くのだが、その年は特にひどく、とうとう、厄介な病気を疑われ、静養を勧められた。そして、大きな病院で検査を受けた。もし、重い病気ならば、ひいおじいさんと同じだ。やっぱり遺伝かと悲しくなった。検査結果が出るまでの不安の中で、僕はひいおじいさんのことを考え続けた。

ひいおじいさんは、病気になった時、どう思う思ひだったのだろう。結局は若くして死んでしまったのだから、さぞや無念だったのだろうな。でも、あの時、お骨は、おやつ？ と思うほど悲壮感がなく、とても健やかな感じがした。根拠は全くないけれどそう感じたのは、いった

いどうしてだろう。

そうだ！ 喜びだ。一度死を覚悟したひいおじいさんは、人を助ける役に立てることを喜び勇んで生きていたのだ。堂々と、朗らかに、人を導いていったその姿は、喜びに満ちていたに違いない。

「甲斐ある人生を生きる」というが、どう生きれば良いのか、誰もよく知らない。長く生きても、健康であっても、何不自由なくても分からないことが多い。ひいおじいさんは、短い人生だったけれど、甲斐ある人生を生きただ。そして、死んでも悔いがなかったのだ。

それに比べて、僕は、人のためにまだ何も役に立てていない。甲斐ある人生を生きたいない。「そのように生きたい」と僕は願った。す

ると、何だかとても元気が湧いてきた。

再検査の結果、幸いにも異常はなかった。

何となく懐かしくて、心がホツとして落ち着く場所、お墓。「ここに私はいません」という歌のように、どこにいても御霊はそばにいくれる。けれど、ここには、大切な人が確かに生きた証がある。

「よく来たな」

大地に抱かれるように土に帰って行ったひいおじいさんが迎えてくれる。つらいことも悲しいことも土に水が染み込むように受け止めてくれる。そして、「お前もしっかり生きよ」という声が聞こえてくるように思うのだ。

《こころの散歩道》

第四回 あきらめず夢に向かう

金光放送センター

今年も野球シーズン真っ盛り。毎年、夏の甲子園は私たちをワクワクさせてくれます。

灼^{しやくねつ}熱の太陽が照りつけるグラウンドで汗と涙にまみれて白球を追う高校球児たち。全国数千の野球部が深紅の優勝旗を目指してしのぎを削ります。

誠二さんも小さい頃から野球が大好きで高校時代は甲子園を目指しました。

高校入学時の身長は、百四十八センチと、小柄だった誠二さん。夢は、甲子園のベンチに入

ること”でした。

小さい頃から野球少年だった彼は、都心で暮らしていたことから、周りに野球が出来るようなグラウンドがなく、そのため、小学生の時には遠方のクラブチームに通い、中学生になると、一人でトレーニングに明け暮れました。さながら熱血野球マンガの主人公のように、腰に巻いたロープで古タイヤを引っ張って繁華街を走る姿は、近所でも有名でした。

体格には恵まれませんでした、それでも諦めず、「どうしても野球部に入る」という決意は揺るぐことがありませんでした。そして、神様に祈りながら、甲子園出場経験のある名門高校を目指したのです。

受験を目前に控えたある日、希望校の見学に出向いた誠二さんの目に飛び込んできたのは、生き生きとプレーする野球部員の姿でした。その年、甲子園センバツ大会出場を決めた部員たちが、目を輝かせて練習に励んでいたのです。その姿に、野球への思いは一層奮い立ったのでした。

その春、希望校に見事合格、早速野球部の門をたたきました。しかし、誠二さんを見た監督の表情は優れませんでした。野球推薦で入部した生徒の身長は、百八十センチ級ばかり。その中で彼は目立って小さく、「果たして練習についてこれるのか」と心配したのです。

監督の心配をよそに、彼は休むことなく練習に励み、誰よりも早くグラウンドへ出ては整備

や用具の手入れなどを率先して行いました。一年生の時は球拾いやランニング、筋力トレーニングに明け暮れ、バットやグローブは使わせてもらえません。厳しい練習についていけず、当初、百人を超えていた同級生部員も、三年生の時には二十人になっていました。

三年生最後の夏、誠二さんの頑張りをずっと見てきた監督は、彼をマネージャーにばってき抜擢しました。野球推薦で入部したレギュラー選手の中にあっても、ボールに飛びつく執念や俊敏さ、野球に対する情熱と知識が買われ、念願のベンチ入りを果たしたのです。

本当は、選手としてベンチに入りたかった。けれども、尊敬する監督から、「今は分からな

いかも知れないが、いつか分かる時がくる」と
言われ、マネージャーとして、自分はどうぞすれ
ばいいかを考えました。

チームメイトは皆、野球の実力はあるけれど
も、勝利に対する“執念”や、“情熱”が足り
ないのではないだろうか。

誠二さんは、みんなが実力を最大限に発揮し
てもらえるように大きな声を出して励まし、明
るく元気に気持ちよく出来るようにと練習メニ
ューを監督に提言して取り組み、チームは着々
と力を付けていきました。

一緒に厳しい練習に耐えてきた仲間、甲子園
への夢を託し、誠二さんはベンチから声を張り
上げてチームを盛り上げ、選手たちを励ましま

す。

一回戦、二回戦と順調に勝ち進み、迎えた地
方大会の準々決勝。対戦相手は後にプロからド
ラフト一位で指名を受ける豪腕投手のいる強豪
校。

誠二さんは監督の隣でスコアブックを付けな
がら選手たちを鼓舞します。三年間、つらい苦
しい練習に耐えて、共に頑張ってきた仲間の一
球一打に祈りを込め、激励します。

ト。
三点を追って九回裏の攻撃もすでに二アウ

最後のボールが相手校のグローブに収まった
時、誠二さんの目から止めどなく涙があふれま
した。あと一步のところまで敗れ、甲子園への夢

はかなうことなく、三年間の野球生活は終わりました。

それから二十数年。誠二さんは今、市議会議員として活躍しています。中でも子育て支援に力を入れ、体にハンディキャップがあっても好きなスポーツに取り組める環境づくりに力を尽くしながら、草野球チームの監督も務めています。高校時代、誠二さんの努力を認め、マネージャーに抜擢してくれた監督のように、一人でも多くの子どもたちに夢を与えたいからです。

野球の守備には九つのポジションがあります。が、人生には十番目、十一番目と、いくつものポジションがあります。みんながそれぞれのポ

ジションで生き生きと夢に向かって進んでいくために、自分は、どんなことが出来るだろうか。

夢は、思い通りには限りません。しかし、大人たちの愛情が、子どもたちの夢に道を付け、未来に希望を与え続けるのだと、誠二さんは信じています。

今年もまた、夏の甲子園に向けて、全国予選が始まります。実際にプロ野球の選手になれるのはごく一握り。しかし、勝っても負けても、一人ひとりの選手の掛け替えのない財産となり、これからの人生の良き糧となっていくようにと祈ります。



《こころの散歩道》

第五回 暑いですねえ

金光放送センター

今年もいよいよ本格的な夏を迎える。昨年は、

三十五度を超える猛暑日が続き、連日の熱帯夜となった。「うだるような暑さ」「とてつもない暑さ」などと、そんな言葉を聞かない日がないほど、その暑さは格別だった。

私たちはあいさつの代わりに、「暑いですね」「寒いですね」とか「よく降りますねえ」などと

と天候を話題にして声を掛け合うことが多い。そのような言葉の後ろには、たいてい、「暑くていかん」「寒くてかなわん」「雨はうつつとうしい」などと、不平の気持ちがくつついている。

そういえば昔のことわざに、「天のことを三

日言わずば長者になる」というものがある。「天気のことであれこれ不足を言わなければお金持ちになれる」というのだ。辛抱することや、プラス思考の大切さを教えたものだろう。

私も、人から、「暑いですね」と声を掛けられることに抵抗を感じてきた。べつに長者になりたいからではない。お天道さまに文句を言っているように思え、何だか申し訳ない気がして、素直に、「そうですね」と言いたくなかったのだ。

「雨が降っていかんなあ」などと言われると、心の中で「そんなことはない。そりゃ外での仕事には差し支えるし、じめじめして快適ではないけれど、雨が降らなくて水不足になったら、

それこそ大変だ。雨は天からのお恵みなんだがなあ”と思う私がいた。

数年前のこと。十月も下旬になって、思いがけず超大型の台風が接近していた。その日、近くの町で大切な仕事があったので、不安はあったが、「神様、何とか仕事が終わわり、無事に帰ることが出来ますように」とお願いして出掛けたのだった。

仕事は無事に終えたものの、家路に向かおうとした時、私の住む地区で土砂崩れがあり、一軒の家が押し潰されたという情報が届いた。一刻も早く帰らなければと、緊張しながら車を走らせた。

ところが、途中で通行止めに行き当たってし

まった。山の土砂が崩れて道路を塞いでいたのだ。すでに復旧作業が始まっているが、なかなか動けない。早く帰りたくて、居ても立ってもいられない気持ちを抑えながら待機していた。やけに長く感じたが、数十分もすると車一台は何とか通れるようになった。前を走る車の後を追うようにして、「神様、無事に通らせて下さい」と祈りながら、恐る恐るその現場を通り抜けた。川は大きく水かさを増し、ゴオーゴオーと音をたてて流れていた。山の斜面からは、まるで滝のように水が流れ落ちていた。

いつこの道が崩れ落ちるか、いつ土砂に呑み込まれるかわからないと思いつつ車を走らせる恐怖は、今でも忘れることが出来ない。

ようやく家にたどり着いた時、近所に住む人

たちは、近くの公民館に避難していた。しかし、台風は少しづつ遠ざかっているようだ。ほっと胸をなで下ろし、心から神様にお礼を申し上げた。

台風の予報がありながら、大したことないだろうと、どこか高をくくって、天地自然の営みを甘くみていたことを深く反省した。

そして、思ったのだ。これほど大きな力が渦巻く天地に対して、無力な人間が何を言えるだろうか。この雨の激しさにも、私たちの考えなどはるかに及ばない、何か大きな意味が込められているのかもしれない。人間はこのとてつもない力を恐れ敬い、どうか無事でいられますようにと、ただただ祈りながら、天地に生かしてもらう他はないのだと。

そんな思いがあつて、雨が降ることはもちろんのこと、暑かったり、寒かったりの天候への不平は自分の中から一掃していこうと、改めて心に誓ったのだった。

ところが冬のある日、久しぶりに会った親しい友人から、「寒いねえ」と声を掛けられ、「僕はお天道さまに文句言わないことにしてるんだ」と返答した。すると、「君は冷たいヤツだなあ。ますます寒くなる」と言われてしまった。同じ頃、新聞を読んでいると「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたかさ」という歌が目飛び込んできた。ビクツとした。そうだなあ、私は天地の営みに心を向けていたかもしれないけれど、人への

優しさ、温かさに欠けていたのかもしれないなあと思った。

「寒いねえ」と声を掛けられたら、「そうだねえ、寒いよね」と受け止めると、その寒さを分かち合い、乗り切れる力になれたかもしれないのに。

そんな思いの移り変わりがあって、今年の夏は、「暑いですねえ」と声を掛けられたら、「そうですねえ、暑いですね」と相手の気持ちに寄り添い、「それでも元気で何よりです」と、そこに感謝の気持ちを添えて、暑い暑い夏を過ごした。

さて、これからいよいよ夏本番。夏は暑いに決まっているけれど、その暑さをどう見るか、

どう言葉にするかは、人によってさまざまだ。人への思いやりと、天地の働きへの敬い、どちらも大切にしながら、毎日をうれしくありがたく過ごしていきたいと思う。

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	(土)	午前5時10分	山陽放送	(日)	午前6時35分
東北放送	(日)	5時00分	中国放送	(土)	5時50分
ニッポン放送	(日)	4時30分	南海放送	(日)	6時00分
東海ラジオ放送	(金)	5時25分	RKB毎日放送	(日)	6時50分
和歌山放送	(日)	6時50分	宮崎放送	(日)	7時10分
朝日放送	(水)	4時50分			

こころで聴くおはなし

<http://www.konkokyo.or.jp/radio/>